

百年史制作よもやま話



伝統と革新の、その先へ
1928 - 2028

みらいにつなぐ 市大の歴史

vol.5

2024, WINTER



図書館（1989年撮影）

1949年に設置された図書館は、1950年に独立した建物となり、1965年に学生ホールと合同の施設として現在の場所に建設されました。その後、1995年に建設された現在の北棟と渡り廊下でつながれ、現在にいたります。また、1949年に設置されて以降「図書館」と称していましたが、1987年に医学部分館が「医学情報センター」に、1999年に金沢八景キャンパスの図書館が「学術情報センター」に改称しました。1989年に撮影された写真では「図書館」の文字が確認できます。

みらいにつなぐ 市大の歴史

Vol.5



雪の金沢八景キャンパス（1984年撮影）



雪の福浦キャンパス（2018年撮影）



雪の金沢八景キャンパス（2022年撮影）

リンク先のページから
「横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ」
を選択してください。



Contents

3 横浜市立大学校歌制定

4 今はなき市大の施設 ①

～白鷗寮・小柴寮～

5 歴史に名を遺す市大教員 ③

関口泰先生

6 図書館から学術情報センターへ

8 医学部の民主化： 無給医をめぐる闘い



1985年 図書館・学生ホール こちらの素材はデジタルアーカイブでご覧いただけます

横浜市立大学校歌制定

横浜市立大学の校歌は
1955年に制定されました。
：お気づきですか？ 新制横
浜市立大学が設立されたのは
1949年のこと。実は開校
後、しばらくは校歌がなかった
のです。

校歌がほしい…！

ようやく校歌を作る動きが
始めたのは1952年。応
援団と新聞部が歌詞を募りま
した。しかし、応募はたった

明るく楽しい歌を

大学として発足して5年
にならんとしているのに校
歌並びに学生歌、応援歌が
ないことを痛感し、ここに
十二月七日自治会、応援団、
文化部、運動部から各二名、
医学部から各一名をもって
校歌作成委員会を結成した。
○募集要領
期間 十二月十五日～
一月三十一日
形式 自由で学内募集
賞品 学長賞五千元 一名
学部長賞三千元 三名

の2点。そこで、1953年
12月15日の「横浜市大新聞」
で再度大々的に募集をかけます
（左上紙面イメージ）。それで
も、締切までに集まったのは3
点のみでした。締切を4月ま
で延期してようやく9点集ま
りましたが、校歌として採用で
きるレベルのものはなく、学長
賞・学部長賞とも選出されな
かったようです。

プロの力をお借りして

やむを得ず、応募作品を素
材としてプロの作詞家に歌詞を
書いてもらうこととなりました。
作詞は、「蘇州夜曲」や「青
い山脈」で知られる**西条八十**
（さいじょうやそ）に依頼。当
時の菊池豊三郎学長が中学時
代からの親しい関係であったこ
とから声をかけました。
作曲には、歌謡曲のみなら
ず校歌や社歌でも西条八十と

校歌のお披露目

こうしてできあがった
校歌は、**1955年6
月18日に県立音楽堂で
開催された校歌発表音
楽会で披露されました。**



古関裕而



西条八十

横浜市立大学校歌

鳴の翼に朝日は耀よい
沖ゆく黒潮とこしえ新し
世界の海港に意気も高らか
あつまる若人 われら われら
ああ 浜大の俊英 われら
若き日みじかし真理は遙けし
究むる情熱 鉄火もつらぬく
潮風かおる園に 友と仰ぐは
理想の青雲 われら われら
ああ 浜大の俊英 われら
民主と自由の紅さす曙
みどり明けゆく歴史の半島
榮ゆる祖国を息吹も新
築かん若人 われら われら
ああ 浜大の俊英 われら

参考文献

- ・横浜市立大学60年史編集委員会編
『横浜市立大学六十年史』横浜市
立大学創立60周年記念事業実行委
員会、1991年
- ・藤田剛志、江藤武人編『横浜市立
大学商学部創基百年史』財界評論
新社、1982年
- ・『白と黒』のハモニーで…横浜市
大の校歌発表会』神奈川新聞（本
紙横浜・川崎2面）、1955年6
月19日

【注】

- ・画像は、国立国会図書館「近代日
本人の肖像（<https://www.ndl.go.jp/portrait/>）収録のものを加工
して掲載しました。
- ・「西条」及び「菊池」の漢字表記に
は諸説ありますが、『日本人名大辞
典』に寄せました。

横浜市立大学校歌は、
こちらからお聞きたいだけです
[https://www.yokohama-cu.ac.jp/
univ/outline/song/index.html](https://www.yokohama-cu.ac.jp/univ/outline/song/index.html)



HOME>
YCUについて>
大学紹介>
校歌・校章

今はなき市大の施設 1

～白鷗寮・小柴寮～

1950年～60年代ごろ、横浜市大の学生の7割近くが神奈川県・東京以外の他府県出身者で、その大部分が民間の下宿から通学をしていました。

しかし、学生の経済状況は厳しく、学費のほとんどをアルバイトに頼っている学生も多かったそうです。

新制大学としてスタートしたばかりの本学は大学教育にふさわしい施設を全て設置するだけの余裕もなく、大学が設置する寮（学寮）は25名収容可能な「白鷗寮」（金沢区竹崎町）のみで、下宿生全員が入

1970年頃の白鷗寮（横浜市大新聞より）



学生が自発的な活動で設置された自治寮でしたが、やはり規模は小さく全学生の生活状況の改善には至りませんでした。1964年に江風寮で集団食中毒が発生したことに端を発して、学生の間で大学による新寮建設運動が全学的なものとなりました。

大学正規の学寮が設置されるまでの暫定措置として、4寮の光熱費などの経費の一部を大学から補助する代わりに、学生は3つの自治寮にも「白鷗寮」が定めた寮則・慣行を適用し、学寮化を進めるなどの対応を進めました。その後、1969年頃に横浜市の市道拡張計画の影響で自治寮の契約更新に陰りが生じたことで、大学の寮建設の動きは加速化していきます。

1971年1月14日、大学と学生との間で規模・用地・管理運営について合意され、同年5月の臨時市会で建設費約7,300万円が可決されたことで、新たな学寮の建設が決定しました。

翌1972年3月31日。新寮（夕照寮：現在の金沢区

本学の長い歴史の過程で、すでに失われてしまった施設がたくさんあります。今回は昭和の激動の時代、本学の男子学生が長い時間を過ごしたであろう学生寮の中から「白鷗寮」「小柴寮」にスポットを当ててご紹介いたします。

六浦東、2018年廃寮）の完成とともに、白鷗寮・小柴寮等の男子寮は廃寮されることとなったのです。

1966年11月28日午前11時過ぎ、金沢区柴町の海苔乾燥場から出火し、約80㎡を焼く火事がおきました。

男子自治寮「小柴寮」の寮生たちは当時いち早く現場に参集し、消防活動に協力しました。翌年1月には、横浜市金沢消防署から感謝状と記念品が授与されました。

「小柴寮」は1953年頃に当時の学生が海苔農家の方と交渉して、持家を借りた自治寮でした。寮歌などもあり、寮生同士の結束も強かったことがうかがえます。



↑金沢消防署から送られた感謝状



1972年に完成した新男子寮（夕照寮、2017年11月）（横浜市立大学Webサイトより）

参考文献

- 横浜市立大学60年史編集委員会編『横浜市立大学六十年史』横浜市立大学創立60周年記念事業実行委員会、1991年
- 藤田剛志、江藤武人編『横浜市立大学商学部創基百年史』財界評論新社、1982年
- 横浜市大新聞縮刷版慣行委員会『横浜市大新聞縮刷版へ1966～1971』平和文化、2019年
- 「金沢で二むね全燃」神奈川新聞（本紙横浜・10面）、1966年11月29日
- 横浜市立大学「夕照寮・萌生寮の思い出エピソード募集！」横浜市立大学Webサイト↓<https://www.yokohama-cu.ac.jp/news/2017/pr/dormitory.html>（2024年5月10日）

歴史に名を遺す市大教員 3

せきぐちたい 関口泰先生

学長に就任するまで

1889年、静岡市深草に生まれた関口先生は、東京帝国大学法科大学を卒業後、台湾総督府での勤務を経て、1919年に大阪朝日新聞社に入社します。朝日新聞社では主に論説委員として、教育、議会、憲法諸問題について論評しました。また、戦後は文部省社会教育局長や大学設置委員会委員ほか、多数の委員や顧問を務め、1950年4月に前年の新制大学発足からしばらく空席となっていた横浜市立大学学長に就任しました。

関口先生が本学の学長に就任した経緯ははっきりしていない部分がありますが、関口先生の経歴や思想から、本学を横浜の学術の中心とし、国際的な視野の広い教養をもった青年を育むことを関口先生自身が強く希望し、また、周囲からも期待されていたことが本学の六十年史にも残されています。

総合大学へ

学長に就任した関口先生の課題は、本学を総合的な大学に発展させることでした。当時、本学は商学部と医学部（医学部進学課程）というあまり関連性のない2つの学部で構成されていました。これをつなぐ第3の学部を設置することで、より総合的な大学を目指

学内外に広く名を知られる先生方にスポットライトを当てる『歴史に名を遺す市大教員』シリーズ。今回は、初代学長の関口泰先生をご紹介します。

すこととしました。横浜市の財政状況も踏まえた結果、商学部と医学部進学課程の一般教養課程を基礎としてさらに発展させる形で新たに文理学部を設置することが考案されたのです。1952年2月には文理学部の設置が認可され、学長就任から2年あまりでこの課題は達成されることになりました。

辞表提出から晩年

文理学部の新設から間もない1952年4月14日、関口先生は横浜市長あてに辞表を提出します。翌15日付の神奈川新聞によれば、関口先生は辞任の理由として「大学にいるよりも評論家でいた方がよさそう。別に学内事情によつてやめるわけではない」と語っ

たそうですが、そのように語る一方で、教員間の勢力争いが起きたり、文理学部の設置およびある教員の採用等で学内の反発にあつたりと、在任中は心労の多い状況に置かれていました。

学長辞任以降は徐々に健康の下降期をむかえ、1956年4月14日、北鎌倉の自宅で急逝しました。



『空のなごり』口絵より

従弟の関口隆克氏によれば……

泰は、戦争中から東亜の諸民族を日本人が指導する役割を自覚し、道義に裏打ちされた経済計画をたてて共同の繁栄の建設に当るべきだと考えていたが、終戦によって武力侵略と軍事優先の思想の消滅したのをかえって好機とし、その事業の根拠地として大学を横浜に創設することを唱導し、少くも文・理学、経済・貿易、医学、農業・園芸の四学部をそなえる計画をたて太平洋大学と称していたが、具体化するに及んで事務局長として赤坂さん*を推し、（後略）（関口隆克「赤坂静也さんと教育調査」より）
*赤坂さん…赤坂静也氏。1950年8月に横浜市立大学事務局長、その後1951年4月から商学部教授、のち文理学部教授。

図書館から学術情報センターへ

横浜市立大学の図書館は「**学術情報センター**」という名称を使用しています。しかし、昔は当然ながら「**図書館**」と名乗っていました。いつ、そしてなぜ「学術情報センター」という名称になったのでしょうか？歴史を紐解いていきます。

1949年 横浜市立大学 図書館の船出

横浜市立大学が金沢区六浦（今の金沢区瀬戸）に開学しました。図書館は、当初は**1号館と呼ばれた木造2階建ての建物**の東南（正門寄り）の2部屋に仮住まいすることになりました。

↓ 1952年頃の瀬戸キャンパス（今の金沢八景キャンパス）※手前が1号館



1950年 独立した図書館の建物ができる

大学構内の西隅（2024年現在サークル棟が建つ位置）に、旧海軍航空技術支廠の薬品庫であった建物を流用し、独立した新図書館が竣工しました。11月には図書館竣工の祝賀行事として、幕末維新開国資料展覧会を開催し、本館所蔵資料のほか、早稲田大学や東京大学、その他の援助を得て多数貴重資料を陳列しました。



←1952年に刊行された図書館案内

しかし、採光も通風も図書館としては十分なものではなく、

当時の学生からは様々な不満や要望が上がっていたようです。

1959年 図書館も巻き込んだ東洋化工爆発事故

1959年11月20日午前10時34分、横浜市立大学の裏手にあった**東洋化工で爆発事故**が起こりました。金沢区全



←1958年頃の図書館内部

爆発被害を受けた→図書館内部

体に避難警報が出たこの大規模な事故で、大学の中でも一番奥にあった図書館は、屋根が吹き飛ぶなどの大きな被害を受

1965年 図書館再建、そして学生運動

東洋化工爆発事故でキャンパス全体に壊滅的な被害を受けた大学では、教員や学生から大学全体の施設の建替に関する強い要望が上がりました。これを受け、まず建てられたのが本校舎です。そして**図書館も、学生ホールと合同の施設として、1965年、今の場所に**

新しい建物が建てられました。1969年には、新しい住

↓ 1983年頃の図書館



けました。とても開館できる状態ではなく、即座に12月半ばまでの休館が決定されました。

処を得た図書館を新たな試練が襲います。**学生運動**です。横浜市立大学の学生運動は、他大学と比較して短期間に集中して盛り上がりを見せましたが、この間多くの建物が過激派の学生に包囲され、ガラスを割られたり室内を荒らされるなどの被害を受けました。

しかし図書館は、全共闘学生との折衝や説得などを行ったこともあり、攻撃対象にはなりませんでした。むしろ、全共闘学生が本校舎をバリケード封鎖している間も、図書館は閲覧をはじめとする通常のサービスを行っており、キャンパス封鎖などにより学生のキャンパス入構が難しかった時期でさえ、図書の貸出を希望する学生の求めに応じて、外で待つ学生にひっそり本を届ける出前のようなことまでしていました。

1995年 現在の図書館の姿に

1983年には、**市大キャンパス整備基本構想**が取りまとめられます。この中で図書館は、収蔵スペースの不足により拡張が必要との指摘がなされています。これを受け、1995年に新しい図書館が建てられ：たのですが、この時新築されたのは、今の北棟（今の学情（学術情報センター）の右半分）のみ。

↓ 学情に保存される完成模型



↓ 現在の学術情報センター ※線より右が1995年築、線より左が1965年築。



どうやら左側も建て替える計画があったようなのですが、現在は1965年に建てられた図書館（今の南棟）と1995年に建てられた図書館が渡り廊下でつながっている状態になっています。学情には写真のような完成模型も保存されているのですが、予定どおりにはいかなかったようです。

医学部図書館の変遷

1952年には、新制の横浜市立大学医学部が発足、南区浦舟に**横浜市立大学図書館医学部分館**が開館しました。1959年には、医学部図書館閲覧室や事務室が新築されます。

1987年、医学部が金沢区福浦に移転しました。これにあわせて、医学部分館も福浦に新築・移転し、「**医学情報センター**」と改称して開館しました。医学情報センターは当初、上から見たときにカタカナの「コ」の形をしていましたが、1994年に増築され、

今の「ロ」の形となっています。

なお、医学部移転後も同じ場所に残った附属病院には、浦舟分室が設置されました。（のちに、附属病院は金沢区福浦に移転、浦舟の病院は「医学部附属浦舟病院」（のちのセンター病院）と改称されます。）



←1987年の医学情報センター

2000年の医学情報センター→

「情報センター」…？

現在の図書館は、それぞれ「学術情報センター」（金沢八景キャンパス）、「医学情報センター」（福浦キャンパス）と名乗っています。図書館ではないと勘違いされやすいこの名前、どのような目的でつけられたのでしょうか？

「情報センター」の名称は、1980年代に起こった図書館の将来構想に端を発します。公立大学という性質から、図書館が有する情報を広く学内外に公開し、学術情報の利用者ニーズに応えることを目的に、施設や資料整備、人材育成などさまざまな計画が立てられました。

1987年には医学部分館が移転を機に「医学情報センター」と改称。金沢八景キャンパスの図書館は、1999年に「学術情報センター」と改称しました。現在では、学術情報センター（金沢八景キャンパス）、医学情報センターに加え、鶴見キャンパス、木原生物学研究所、センター病院にそれぞれ図書室が設置され、横浜市立大学の図書館機能全体に対しても「学術情報センター」という名称を用いています。また、金沢八景キャンパスの情報教育実習室の運営も「学術情報センター」が担っています。

参考文献

- ・横浜市立大学60年史編集委員会編『横浜市立大学六十年史』横浜市立大学創立60周年記念事業実行委員会、1991年
- ・『横浜市立大学図書館案内』横浜市立大学図書館、1952年
- ・『横浜市立大学 図書館・学生ホール』横浜市立大学事務局、1965
- ・『学生便覧』横浜市立大学事務局総務部学生課〔編〕、1966
- ・横浜市立大学医学部創立50周年記念誌編集委員会編『横浜市立大学医学部創立50周年記念誌・かもめ50』横浜市立大学医学部創立50周年記念事業実行委員会、1994年

医学部の民主化：無給医をめぐる闘い

「働き方改革」—今ではすっかり耳馴染みのある言葉になり、本学でも、医師の働き方改革が重要な取り組みとして挙げられています。しかしながら、昭和40年代ごろまでは、医師国家試験に合格しても、しばらくは『無給医』として診療に携わるのが当然とされてきました。

10月の調査の結果、大学病院の医療水準を支えているのが多数の無給医であることが明らかになると、1966年1月26日、総医局会で「副手・大学院生の会」が発足し、横浜市に対して66名の診療助手の設置要求を行いました。

無給医の実態を訴える運動

この当然が1964年6月2日の「全国医学部無給医局員対策委員会」の結成を皮切りに、大きな運動へと発展していきます。

無給医運動の始まり

1965年9月15日、本学医学部では全国委員会への出席者を中心となり、「無給医の集い」懇談会が発足しました。同年

で、後に事務局からは、無給医問題は直接市には関係ないという見解が出されてしまったのです。

ふたたび無給医の実態を訴える運動

1966年11月29日から12月1日の3日間が「ふたたび無給医の実態を訴える全国統一行動日」とされました。本学では多くの団体や職員が支援の姿勢を見せたほか、医学部教授会も声明を発表し、ついに市当局から、次年度予算にできるだけのことをするという回答を得ました。

無給医をなくし登録医法案を粉砕する運動

二度の全国統一行動日

を経てもなお、診療助手設置の要望に対して十分な回答を得ることはできませんでした。そして三度目となる1967年12月の「無給医をなくし登録医法案を粉砕する全国統一行動日」、ついに本学では、一週間の無給医の診療拒否を伴う運動へと発展したのです。

しかしながら、無給医問題への関心そのものが全国的に低下してしまったのか参加大学は少なく、次第に無給医運動は、インターン制度廃止運動へとバトンタッチしていきました。そして1968年5月10日の医師法一部改正により、インターン制度に変わる臨床研修制度の発足に至りました。

無給医問題は、無給医自身が主体性をもって運動を進めるべき。大学院生もその情勢（研究時間が少ない）から、ともに運動を進める以外に道がない。（無給医の集いで確認）

→本学大学病院の重要問題であることが明らかに



参考文献

- ・横浜市立大学60年史編集委員会編『横浜市立大学六十年史』横浜市立大学創立60周年記念事業実行委員会、1991年
- ・横医新聞縮刷版刊行委員会編『創刊二十五周年記念・横医新聞縮刷版』横医新聞縮刷版刊行委員会、1980年

100周年記念事業へのご協力のお願い

横浜市立大学は2028年に創立100周年を迎えます。未来に向かって本学が発展し続けるため、4つの記念事業プロジェクトを推進しています。ぜひ、本学の取組にご賛同いただきご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

問い合わせ先 横浜市立大学卒業生・基金担当：045-787-2447

詳細はこちら

